高杉良

小説・日本興業銀行

第二部

高杉 良

小説・日本興業銀行

第二部

小説　日本興業銀行　第二部
昭和六十二年一月三十日初版発行

著　者　高杉　良
発行者　角川春樹
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話　営業部〇三―二三八―八五二一
編集部〇三―二三八―八四五一
振替口座東京三―一九五二〇八　〒一〇二
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
Printed in Japan
ISBN4-04-872457-6　C0093

小説　日本興業銀行　第二部　目次

第六章　〝A or B〟の選択　五

第七章　昭電疑獄　七五

第八章　再建整備完了　三一

第九章　日本開発銀行の設立　二七

装丁　辰巳四郎

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

小説　日本興業銀行

第二部

第六章　〝A or B〟の選択

1

昭和二十三年三月二十六日午前十一時四十分に、栗栖赳夫国務大臣は、北村徳太郎大蔵大臣とともに農林中金ビル五階のGHQ・ESS（経済科学局）局長執務室の隣室に仮設されたドレーパー使節団事務所で、ドレーパー団長と会見した。

同月十日、片山内閣が総辞職し、芦田内閣が成立したのに伴って、栗栖は大蔵大臣を辞任し、経済安定本部長官兼物価庁長官に就任していた。

片山内閣は、官吏生活補給金支給の財源をめぐって社会党左派の鈴木茂三郎（衆議院予算委員長）らとの間で意見調整がつかず、二月十日の衆議院予算委員会で同補給金支給に伴う補正予算案が賛成二十四、反対二十五で否決されたため、総辞職を余儀なくされた。

社会党党首を首班とする連立内閣はわずか九か月の短命に終わった。

米陸軍次官のウイリアム・H・ドレーパー中将を団長とする使節団の目的は、戦後の日本の賠償(ばいしょう)および復興に関して調査するためだが、ドレーパー自身は戦後二度目の来日で栗栖とは旧知の間柄であった。

この日の会談で栗栖は、経済安定本部で立案中の経済復興五か年計画について説明、これに関する詳細な英文資料をドレーパーに手交した。

会談が終わったのは午後一時五分前だが、辞去しようとする栗栖をドレーパーがドアの手前で呼び止めた。

ドレーパーは、知り合いの日本人の消息を栗栖に尋ねたのである。栗栖はドレーパーの質問に答えたあとで、逆に質問した。

「金融機関の再建整備に際し、米国政府およびGHQは大銀行および信託会社に対して集中排除法を適用する方針ですか」

流暢(りゅうちょう)とは言いかねる英語だが、充分その意は相手に伝わったようだ。

ドレーパーは、まだ公表の段階ではないがと前置きして、「大銀行および信託会社に集中排除法を適用することは考えていない」と言った。

栗栖は一歩踏み込んだ。

「日本興業銀行は存続するんでしょうか。さしつかえなければお聞かせください」

語尾がうわずったのは、胸のときめきを抑制しかねたからだ。

ドレーパーは微笑を浮かべてうなずいた。
「日本興業銀行はそのまま存続させる方針だから、安心したまえ」
栗栖は思わずドレーパーに最敬礼していた。
栗栖がドレーパーと別れの握手を交わして使節団事務所を出ると、別室に待機していた三ツ本秘書官がドアの前に立っていた。
「きみ、朗報があるよ」
声が弾んでいる。
栗栖はずんずんエレベーターのほうへ歩いて行く。
エレベーターの中で三ツ本が訊いた。
「朗報ってなんですか」
エレベーターの中ではこみあげてくる喜びをもてあまして黙っていた栗栖が、大臣専用車の中でうちあけた。
「大銀行にも信託会社にも集中排除法の適用はないぞ」
「なるほど朗報ですねえ」
三ツ本は首をねじって右側の栗栖をとらえた。
「それだけじゃないぞ。興銀もそのまま存続されることになった」
「……」
「きみ、驚かないのか」

「いや、驚いてますよ。ドレーパー次官との会談の席ではっきりしたんですか」

「そうじゃない。会談が終わったあとで二人だけで話したんだ。これは、米国政府の方針だから、司令部が愚図愚図言っても問題にならんだろう。ドレーパー次官は、まだ公表の段階ではないと言っていたから、秘密を要するがね」

大臣官邸に戻ってから、栗栖はドレーパーから聞いた話をメモにして、興銀の二宮副総裁に至急届けてもらいたいと三ツ本に指示した。

「興銀だけでよろしいんですか」

三ツ本の質問に、栗栖はちょっといやな顔をしたが、五秒ほど考えてから、「大銀行には知らせておこうか」とつぶやくように言った。

「そうすべきだと思います」

三ツ本は、どうせ知らせるんなら、興銀だけというのは公平を欠くと思ったのである。

「二宮君から、三菱の小笠原氏と帝銀の佐藤氏、それから住友の堀田氏に極秘事項として伝えるように、きみから話してくれ」

「承知しました」

三ツ本はさっそくメモを入れた封書を背広のポケットにしまって、興銀へ向かった。

小笠原とは、三菱銀行副頭取の小笠原光雄、佐藤は帝国銀行頭取の佐藤喜一郎、堀田は住友銀行副頭取の堀田庄三のことである。

栗栖は、三ツ本が退室したあと首相官邸へ出向き、首相兼外相の芦田均に面会し、この件を報告し

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

た。

「それはなによりだ。ワシントン政府の対日政策の転機を示す証左のひとつと言っていいね。日本経済の自立復興のために、かくあらねばならないことを認識し始めたということだよ」

芦田の冷静な受け答えを聞いて、栗栖は興奮を抑えかねている自分を意識して、一層顔が赤らんだ。

「同感です。ドレーパー使節団の来日はまさにワシントンの対日政策の転機を裏付けるものでしょうね。二つの世界の対立が激化するなど国際情勢が大きく変化してますから」

栗栖は、その足で日銀へ回り、一万田総裁に会った。

もちろん、芦田首相も一万田日銀総裁にも出かける前にアポイントメントは取ってある。

一万田は、栗栖の話を聞いて、大いに喜んでくれた。

三ツ本秘書官が興銀に駆けつけて来たのは二時過ぎだが、二宮副総裁は、岸総裁と打ち合わせ中であった。三ツ本は急用だから至急取りついでもらいたい、と金井秘書課長に頼んだ。

二宮はほどなく総裁室から出て来た。

三ツ本は廊下で、栗栖から託された封書を二宮に手渡した。

「極秘文書ですよ」

〝二宮善基殿、栗栖〟と上書きにある茶封筒を受け取った二宮の顔がこわばった。

対照的に三ツ本の表情は冴え冴えと輝いている。

怪訝そうに二宮が訊いた。

「中身はわかってるのか」
「ええ」
「栗栖さんはなにを言ってきたんだね」
「まあ読んでください」
「その顔だといい知らせだな」
「そのとおりです」
「それなら、総裁にも知らせたほうがよくはないか」
「同感です」
三ツ本は、岸総裁に対する二宮の気遣いをほほえましく思った。栗栖は岸を疎外しているほどではないにしても、親しみを感じていないらしい。なにかにつけて二宮と連絡することが多かった。
「きみ、一緒に話していかんか」
「いいですよ」
二宮と三ツ本が総裁室へ入った。
「やあ、しばらくだねえ」
岸は愛想よく三ツ本を迎えた。
「お元気そうですね」
「お陰さまで、なんとかやってるよ。三ツ本君はすっかり秘書官稼業(かぎょう)が板に付いたね」
「冗談じゃないですよ。早く興銀に戻してください」

三ツ本と二宮が岸にすすめられて丸テーブルの前に坐った。
「三ツ本が栗栖さんからの土産を届けに来てくれました。よほど大きな土産らしいんです」
二宮は茶封筒の封を切って、メモを取り出して、眼を走らせている。
「ふーん。これは大変なものだ」
二宮は唸るように言って、メモを岸に示した。
〝ワシントン政府は、大銀行及び信託会社に対して集中排除法を適用せず、興銀は其の儘存続せしむる方針であります。此の事は本日ドレーパー陸軍次官から小生が直接聞き出しました。極秘事項として取扱い願います〟
メモからあげた岸の顔が上気し、喜色が漲った。
「栗栖さんも大変喜んでました。いや、あの人があんなに興奮してるのを見たのは初めてです」
「そりゃあそうだろう。俺だって胸がドキドキしてるよ」
二宮の声がうわずった。
岸は喉の渇きを覚え、先刻秘書嬢が運んで来た緑茶の残りを一気に喉へ流し込んだ。
「栗栖さんはドレーパー陸軍次官に一人で会ったの」と二宮が三ツ本に訊いた。
「いや、北村大蔵大臣と三者会談です。柏木事務官が通訳として出席しました。ただ、このメモにあることは、会談が終わったあとでドレーパー次官と栗栖長官の二人だけで話したそうです」
「すると、公式なものではないわけだね。それで極秘事項か」
三ツ本が岸のほうを気にしながら言った。

「三菱の小笠原副頭取、帝銀の佐藤頭取、住友の堀田副頭取に、二宮副総裁から極秘事項として伝えてほしい、と長官から伝言がありました。興銀だけに洩らすのは気が引けたんじゃないですか」

「なるほど」

二宮がうなずくと、岸も賛成した。

「それがいいね」

秘書嬢が緑茶を運んで来たので、話が途切れたが、ややあってから、二宮が「夢のようだな……」と感慨深げに言った。

「ブレントリンガーとアリソンから、興銀のクローズが決まっているようなことを言われたのは、わずか五か月前だからなあ。あのときは生きたソラがなかった」

二宮がGHQ・ESSのブレントリンガー証券課長とアリソン担当官に会ったのは昨年十月十五日のことだ。

「クローズの噂は、わたしが秘書課長をやってたときに二度も出ました。某夜、伊藤総裁、末広副総裁にお伴して、河上さんのお宅に相談に行ったことがありますが、クローズに備えて、一人当たり一律千円の生活資金を支給しようなんて、本気で考えたんですからねえ」

「そう言えば、総裁室の絨毯を司令部に徴用されたなんてこともあったね」

三ツ本と岸が顔を見合わせながら話しているとき、二宮はテーブルの上のメモを手に取ってもう一度読み返していた。

「こんどこそ信じていいんだろうな。糠喜びなんてことにはならんだろうね。司令部には振り回さ

れ続けてるから、疑い深くなっていけない」
二宮はメモを封筒にしまってから、岸のほうへ眼を遣った。
「これでいよいよ増資が本番になるわけですね」
岸が大きくうなずき返した。
「忙しくなるねえ」
「けっこうなことじゃないですか」
「問題は司令部が増資をいつ正式に認めてくれるかだね」
「時間の問題でしょう」
三ツ本が緑茶をすすってから、思い出したように言った。
「いくら極秘事項でも、元総裁の河上さんと伊藤さんの耳には入れておかないという法はないでしょう」
「それはそうだ」
二宮は、口へ運びかけた湯呑みをテーブルに戻して、言葉をつないだ。
「理事諸君にも話していいんじゃないかな」
「そうだね」と、岸が応じた。

2

四月二十九日は天長節で祝日だったが、この日午前十時に、二宮副総裁、中山理事、江頭資金部長の三人がGHQ・ESSから出頭するよう命じられた。通訳として外事部の峰島が同行した。

先月二十七日付で発令された「金融債の旧勘定移換の措置」によって金融機関所有の興業債権を新勘定から旧勘定へ移換、この元利払いが停止されたにもかかわらず、興銀は決定直後に旧勘定の債券を償還してしまったが、二宮たちはこの廉でGHQから呼びつけられ釈明を求められたのである。

調べてみると償還したのは数件に過ぎないことが判明した。しかも、いずれも回収可能なものばかりである。

しかし、GHQから責任者が呼びつけられたとなれば、ことは穏やかではない。どういう経路でGHQの知るところとなったのか、誰かが意図的にGHQに密告したとも考えられる。とくにアンチ興銀の急先鋒である証券課から召喚されたことは、ひっかかる……。

このとき、二宮や中山が虞れたのは興銀の再建整備に支障が生じるのではないか、ということであった。

「百鬼夜行としか思えないねぇ。増資問題を詰めなければならない大事なときに、まずいことになった」

そう言って嘆く二宮を中山は宥めた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c